



# 影絵友達



bloodmaria

少年は毎日のように廃工場へと出向いている。

何の約束もしていないが、今日も少年を待っていてくれるだろう。いつも少女と彼女の父親が、一足先に廃工場へ散歩に来ていた。

少女とは一緒に遊ぶものの、まだ少年は彼女の父親を見たことがない。少女を廃工場へ連れてくると家へ一旦帰ってしまうらしい。

少女は足が悪いので鬼ごっこは無理だった。

だから少年と少女は座ったり寝転んだりして、ほとんど動かずに遊んでいた。鬼ごっこが出来ずとも贅沢は云えない。

少年は病気のせいで引越しを余儀なくされて小学校にも通えず、友達は一人も残っていない状況である。いまは遊び相手がいてくれるだけでも嬉しかった。

少女は少年より二学年程上に見えたが、遊んでいる間は気兼ねなく接してくれる。

とりとめもない話をしながら二人は影絵でよく遊んだ。

薄汚れた灰色の壁に少年の犬が忙しく踊っている。少女のカマキリはノソノソと大きい。吹き込む風を切り裂き、片手の鎌が撫で動く。

あちこちに乱雑と積み捨てられた木枠は、巨大な玩具ブロックを思わせた。そう思えば殺風景な倉庫内も二人だけの楽しい根城へと豹変する。

和やかな時間は優しく過ぎていった。

夕闇に全ての影が溶け消える間際まで、儚さを吹っ切るような明るさで、二人は時間を懸命に共有した。

少女は次第に元気を失っていった。最初に出会ったときのように。

初めて出会った頃、少女は木枠をトントンと叩き、父親の名前を暗記でもする様子で虚しそうに呟いていた。

でも少年に声をかけられて、少女は本来から備わっていただろう可憐さを取り戻していたのだ。

いまは、やつれ果てた身体が風に煽られるのも億劫そうに見える。

壁に映えたカマキリの鎌もすっかりと折りたたまれてしまった。もう一度、雄々しく振り上げられることは多分ない。

『ごめんね……もう帰らなきゃ。また遊べるよ、きっと』

別れの言葉を口にしたのは少女が先だった。少年は無言で頷く。

少女に頼まれて、少年は彼女の家へ向かった。少女の伝言を知らせねばならない。

『あそこの工場で待っているから迎えに行ってください。違う場所になるけど、また一緒に遊びたいです』

少女の母親は青ざめて口を開けたまま、少年の思い出と伝言を聞いていた。

ようやく会えた少女の父親は膝からドサリと床へ落ちたきり、ダンゴムシのように丸まって動かなくなった。

『ここに連れられてきて暴行されたんだ。薬が切れてな、今度は自分のやったことを恐れてハイになった。それで、あそこら辺にあった木杵へ朦朧としてる自分の子を頭から押し込みやがったんだ』

刑事だった祖父が散歩がてら、昔に起きた凄惨な事件現場へワタシを誘ってくれた。廃工場は時折、そよ風の合間に強風が四肢を揺らそうとする野原のど真ん中に放置されていた。

どことなく絵になった朽ち方で、事件を聞いてもいまいち恐怖は背筋を吊り上げない。

入る前は年月を経た湿気特有の臭いを予感していたが、倉庫内は時間の流れが止まっているかのようにカラリとしていた。

『どうしたと思う？ 捨てられていた薪ストーブの近くで、父親は薪割り用の斧を見つけた。殺す気はなかったらしいんだ。ただ、どうにかして行為の証拠を隠滅したかったらしい。逆さになった女の子の両足を広げてな、証拠を"抜き取る"ことにした。斧を女の子の下部に叩き落としたんだよ。父親は、満足して……満足したから、帰宅した。ちゃんと後から帰ってこいよ、と云わんばかりの軽さで立ち去ったのさ。……それから何日も、女の子は生きてたんだ』

夕間時の強く打つような陽光が、ガラスを失った天窓から斜めに差し込んでいる。目前の殺風景な壁は西日を受けて灰かに白く輝いていた。

『下部には斧が斬り刺さったまんま、へし折られた両足は膝からくの字に曲がっていて、発見されたときには腐って逆方向へ畳まれていた。そうさな、確かにカマキリに見えたのかもしれない』

映画館のスクリーンと化した壁を指して、祖父は何かを待っているかのように少しの間だけ沈黙した。

ワタシの疑問を見抜いていた。そして、それこそ祖父が話したかった長年の疑問だったらしい。ワタシへ振り向き、祖父は薄ら寒い微笑を浮かべる。

ゆったりと忍び寄ってくる黄昏の黒淵に、やっとワタシは焦燥感を覚え始めた。紛れもなく、それは恐怖だ。

『ああ、少年のことだろう？ 当然、詳しい事情を知りたかったからオレたちは探したよ。見つけたんだ。女の子の母親に少年は名乗っていたんでな。それ自体は、すんなりと見つかったんだ。だけど、遅かったんだ。遅すぎた。聴取する間もないうちに少年は死んでいた。今頃、あの世で二人仲良く遊んでいるんだろう。でも……おまいさん、きっと勘違いしてるな。こう思っているんだろう？ 少年は、少年の云っていた病気で死んだんだと。それなら、それぐらいならオレも納得できるんだ。知りたいか？ 少年が何で死んだのか』

太陽の沈む瞬間の輝き。白い輝きの中、ワタシたち以外の影が二つ、壁の中でぐらりと揺ら

めく。

鎌を振り上げた大きなカマキリが一つ。その隣に――

『――犬だ。この野原へ親に捨てられて、野犬の群れに喰い殺されたのさ。……………女の子が殺される、ざっと40年以上も前にな』

あの影は何故あそこに浮かぶのか？ 何故、今更、ワタシなんかを観客としているのだろうか？ 影を映し出している者が背後にいる。祖父のイタズラに決まっている。

ワタシを見ている……ワタシの背後を見ている祖父の表情は冷たい笑みを浮かべたままで、畏れの氷海へと没していた。

恐怖が足先から頭頂までを硬直させる直前、ワタシは声にならない悲鳴を上げて振り返る。漆黒の鎌が振り落とされた時、世界は夕闇に溶け消えた。

作者:華巢野 将外・ダーケン